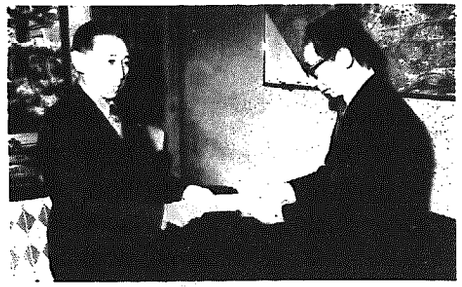
必読。今号2ページから6ページにわたって掲載されているものは、昨年12月16日(水)、町長室で都市問題懇談会会長浅妻康二氏から、清水善夫副会長同席のもと、浅妻町長に手渡された＝写真＝提言書「黒埼町の将来の望ましい姿」の全文です。(写真、グラフなどは編集部で補足。)

提言書は、Ⅰ、提言のための黒埼町の現状分析とⅡ、田園都市としての黒埼町から成っています。内容を一言で言えば、「今、黒埼町は何をするべきなのか。」ということです。

都市問題懇談会は、昨年の4月に町長の諮問機関として発足しました。(広報184号)以来、12名の委員は12月までに9回の討議を重ねました。そして、今回の提言書を踏まえて、今年8月に、〝各論〟となる最終提言をする予定です。

黒埼町の将来の望ましい姿（提言）

田園都市としての黒埼町
―黒埼町の〝コミュニティ〟づくり
あるいは黒埼町の〝町〟づくり―



Ⅰ 提言のため黒埼町の現状分析

黒埼町は、明治三十四年に金巻村（大野町を含む）、板井村、木場村、黒鳥村、鳥原村が※1合併して現在の地域となり、昭和四十八年に町制を施行して現在に至っている。

そこには八十年の歴史がある。黒埼町の将来の望ましい姿を展望するためにも、八十年の歴史を通して黒埼町の現状を分析してみる必要がある。

一、明治三十四年から昭和二十年まで

黒埼村発足の基盤になった五カ村は基本的には農業生産を中心にして来たもので、そのなかに〝大野町〟と呼ばれる近郷農村を背景にした「市」を中心にして発展した商業的人口集中の地区があった。

五ケ村の部落、それに〝大野町〟を含めて明治三十四年に合併した黒埼村は、※2人口九千八百六十人で当時としては、まさに大村であった。大村であるだけに、直接の連帯としては、部落の共同体的結合が基盤になっていた。それは当時、藩制や水利の利害関係からの必然性でもあったとみるべきであろう。〝大野町〟は黒埼村の人口の三分の一があったにもかかわらず、黒埼全体の中心的エネルギーにはならなかったというのも、各部落を中心とした三分の二の農生産エネルギーが支配していたからである。

これがややもすると、現代の黒埼町が住民意識として、〝部落根性〟を温存することになり、今後の発展のためにはかなり是正されてゆかなければならない性格でもある。

それは、それなりに認めなければなるまいが、信濃川と中之口川の交流点に位置した黒埼村は、低湿地帯として苦しんだ時代はあるにしても、大河津分水の完成、農地の基盤の整備とともに、文字通り穀倉地帯として発展し、〝大野町〟も交易の中心として発展してきた。

二、昭和二十年から昭和三十年後半まで

敗戦は、全国的に大変革をもたらし、混乱はやがて復興へと転換した。そのなかで、黒埼村も戦争の打撃は大きかったにしても、今にしてみれば、苦しみのなかにも農地解放、食糧増産と、黒埼村としては農業生産に全エネルギーが投入され、活気に満ちた時代でもあった。

そうした時代を背景にして、昭和二十三年、※3楚川新田丙、合子ケ作の合併が行われ人口一万人という常識の黒埼町が一万三千人台に飛躍し、新潟市と境界を接するようになる。

昭和二十六年から三十六年にかけて、全国的に町村合併がすすめられ、市町村の再編成が行われたが、活気に満ちていた黒埼村では、「人口規模からみた場合町村合併促進法が期待する人口八千人の基準をはるかに上廻る一万四千人を有し、また財政にも恵まれているため、適正規模町とみなされ、今次合併になんら関係することなく現在に及んでいる。」（※4昭和三十七年村当局発表）と受けとめ

られ黒埼村の伝統をそのまま受けとめてゆくという姿勢であった。これも当時の状況としてはそれなりに肯定することができよう。

三、昭和三十年代後半から現在

基本的に明治三十四年以来の黒埼村は、農村社会として生成発展してきたと言ってよい。苦しい時代もあったにせよ、恵まれた条件と状況があった。それなりに努力はあったにしても、特に積極的意図的な努力ではなかった。

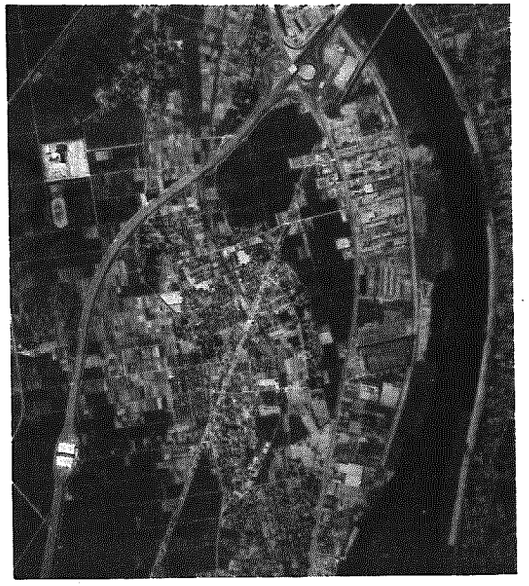
それが、昭和三十年代後半になると、従来の姿とは質的な変化があらわれてきた。人口をとりあげてみると、昭和三十五年、一万四千百七十四人――昭和四十五年、一万六千八百十八人――昭和五十年一万八千五百九十二人――昭和五十五年、二万五人となっている。この増加率は県内にも数少ないものである。

この背景は、まさに都市化による社会変動である。従来の黒埼村は、自然地理的条件のなかで発展してきたが、この時代における変化はまさに産業化都市化の政策による変化である。※5新産業都市新潟地区に含まれる黒埼村の変ぼうである。人口増は、従来の黒埼住民の自然増ではない。※6団地造成、マイホーム建設と、新潟市に職場をもつ他市町村民の移住である。さらに黒埼村民とくに農業の兼業化が進行し、新潟市に職場を求める傾向が強まり、※7昼間人口は新潟市に移動するという、新潟市の都市エネルギーの浸透となった。

黒埼村は農村社会の原理では律しきれなくなった。こうした推移のなかで、昭和四十八年黒埼町へと町制に移行した。村制と町制では直接行政上の差異はないにしても、時代の推移を見通すとき町制への移行はうなづけるものがある。

ただ、ここで考えなければならないことは、村から町へという行政の変化、呼称の変化だけで済まされない。黒埼村から黒埼町への質的変化の問題がある。

村から町への質的変化はそう容易にできるものではない。ただ、黒埼町を取り巻く社会の変化、新潟市のエネルギーの強さに、黒埼町がなるようになるでは、それと気付いたときに、黒埼町が荒廃していたということになる。それでは現代に生きる黒埼町民として、余りに主体性を喪失しているということになりかねない。



▲急速に変貌する黒埼町北部。昭和53年9月撮影。現在では工事中の新幹線線路が完成していますし、住宅もそうとう増えているはずです。

※7　表1 昼間人口及び昼夜率(昭和50年)

夜間人口(A)	18,592人		
区分＼人	総数(人)	就業者(人)	通学者(人)
夜間人口のうち就業、通学人口(B)	10,206	9,193	1,013
流出者数(C)	4,536	3,856	680
町内で就業、通学(B−C)	5,670	5,337	333
流入者数(D)	1,931	1,651	280
昼間就業通学人口(B−C+D)	7,601	6,988	613
昼間人口(A−C+D)	15,987人		
昼夜率	86%		

資料：国勢調査

昭和50年国勢調査によれば、昼間流出者数は、4,536人、これに対して流入者数は1,931人で夜間人口18,592人に対し、昼間人口15,987人で昼夜率では86%と昼夜間人口の差が大きい。このように昼間時の流出が大きいのは、新潟市のベットタウンとしての性格が強いことを物語っています。

四、役場庁舎建設の問題

黒埼村から黒埼町への八十年の歴史を概観してみても、黒埼村発足の当時から、村名の決定、現役場の位置についても、つねに農村部の住民感情と〝大野町〟の感情が妙にからまってきたという低流がある。いまや、黒埼町のおかれた立場では、新潟市及び周辺市町村と連携機能分担をしてゆかなければ、黒埼町自体の特徴が失われかねないのである。

新潟市との合併は現段階では考えられないし、新潟市自体も考えていない。しかし、町の将来の望ましい姿を考えるとすれば、黒埼町、新潟市、その他周辺、白根市町村の連携を考えておかなければならない現状にある。そのときにかつての部落感情、住民感情にとらわれることは将来に禍根を残すことは明らかである。

その意味で、いま役場庁舎建設が現実の問題になっているが、これは単に現在の利害得失や、住民感情の名の下にかつての部落根性でことが進められてはならない。かなり長期的視野に立って決定されなければならない。

注　釈

※1この合併は弱小町村を整理することがねらいで、県下八百十六町村が一挙に四百五十六町村となった歴史的大合併です。しかし、この後続く各部落間の対立の発端でもあるのです。

※2明治三十四年当時の人口九八六〇人は、新潟県が刊行した町村合併史に記載。

※3善久・山田は当時川の中州の中にあり、曾川村に橋の架設を要望したが受け入れられず、離産の末本町と合併し、河状整理を行って現在のようになりました。

※4新潟県市町村合併史に記載。

※5昭和三十七年新産業促進法が制定され、本町は三十八年新潟地区に包含された指定されました。

※6昭和四十一年新潟県住宅供給公社により本町では初の団地造成が行われ（寺地団地）、以後四十三年に焼鮒団地、五十年に鳥原大明団地が建設されています。